

声の再構成を通じた書くことの学習

Teaching writing and reconstruction of voices

小林 一貴*・野口 正史**

KOBAYASHI Kazutaka and NOGUCHI Masashi

1. はじめに

書くことの授業においては、学習者は教科書や資料、教師や他の学習者の発言、教室外の生活における体験などさまざまな言葉に接しながら書くことを行っている。そこには複数の言葉と相互に関わりながら、そうした言葉をひとまとまりのテキストとして作り上げていくという書くことの学習の基礎となる事実を認めることができる。こうした認識から、複数の言葉との相互関連によってテキストを成立させていくという学習のあり方が構想されてきている。

テキスト相互の関連性は書くことの学習に関してどのように整理してとらえればよいのか。Lemke (1992) は、バフチンの対話理論における「異種混濁性」を教室の学習の研究に応用する方法として間テキスト性の概念を導入している。そこでは学習に関わる間テキスト的特徴として、次の4つを挙げている。

- 同じ命題内容の主題展開のパターンを共有するテキスト（テーマを共有するテキスト (cothematic texts)
- 同じ対人的、あるいは価値を志向する視点を示すテキスト（立場を共有するテキスト (co-orienting texts)
- 同じ行為の構造において他の側面の要素に属するテキスト（行為を共有するテキスト (coactional texts)
- 同じジャンル構造を有するテキスト（ジャンルを共有するテキスト (cogeneric texts)

(Lemke, 1992, 259-260)

例として、詩と教科書の一節について、それらが両方とも革命についてのものであれば、テーマの共有となる。しかし、同じ裁判における被告側の弁護士のスピーチと証拠としての書簡は必ずしもテーマの共有にはならないが、それらは行為を共有することになる。こうした間テキスト性の概念と分析の観点を教室の学習場面に応用することにより、これまでの書くことの学習に関するジャンルの分析や、一般的にとらえられてきた授業の展開について、より多くの研究が可能になるとする。具体的には、読まれたり参照される教科書とクラス全体と教師の発言、小集団での学習の会話、発言、そして授業において書かれた生徒のレポートなど、より授業談話の記録に基づいた「行為の共有」についての議論ができるとする。

こうした見方は単に授業の分析方法に関するものではない。意味の生成を言語という記号の資源と構造との関連からとらえることにより、行為の意味の範囲を描き出すことを可能とするという点が重要となる。あるジャンルの文章を書くことについても、単に言語の持つ構造的な側面でのみ説明することの限界を超えて、関連するリソースと構造との関連からとらえる視野を提供する。

書くことを複数の言葉との相互関係によりテキストを構築していくというとらえかたは、高等教育におけるアカデミックライティングの基盤となる理論として20年以上にわたる研究の流れがある。先

* 岐阜大学教育学部国語教育講座

** 揖斐川町立谷汲小学校

行する研究やデータの引用などによる専門的な研究分野の活動は、そうした対話的なテキストの構築を直接に基盤とするという考え方をとるものである。しかし、これは必ずしも高等教育に限定されたものではなく、書くことの基本的性質として初等、中等教育段階に広げて考えることにより、学習者にとって一貫性のある書くことの学びにつながるものと考えられる。

こうしたテキスト間の相互関連に基づく書くことの学習で重要となるのが主題の扱いである。Lemke (1988) は、この主題を2つに整理している。一つは、「間テキスト的主题形成」(intertextual thematic formations: 'ITF(s)') というもので、これはトピックや主題、テーマについて高度に標準化された意味的パターン(「主題-意味的パターン」)である。あるトピックについて述べる場合には、可能性としては無数の具体的な表現が認められるものの、実際には標準化された限られた主題構成のパターンというものがあり、学習者が書く際にも何らかの方法でこうした標準的な意味のパターンが用いられるものと考えられる。同時に「テキストに特有な主題の構成」(TTF: textspecific thematic formation) というものがあり、これは標準化された主題のパターンが認められつつも、それを主題とするテキスト間の相互関連による声の構築において付与される固有の意味を持つ主題になる。(Lemke, 1988, 46-49) つまり、ITF(s)'としてある程度の共有可能なパターンが用いられつつ、そこに書くことにおいていかにTTFとしての固有の意味が与えられるかが学習として問題となる。

2. 声の対話的構築による書くことの学習

テキスト間の相互関連に基づく書くことの学習という見方においては、書き手は既存の言葉にどのように関わり、解釈し、自らの作り出すテキストに取り込んでいくかという活動に取り組むことになる。そこで導入されるのが「評価」と「声のパターン」という考え方である。「評価」とは、このように既存の言葉に対する関与に伴う価値判断のことであり、この「評価」の認識が書くことによりテキストを作り出すことを基礎づける一つの要因であるという見方を提供する。

Hunston & Thompson (2000) は、「評価evaluation」と「評価表現appraisal」の基本的な機能について次のようにまとめている。

- (1) 話し手/書き手と、聞き手/読み手との間の関係を構築し維持すること
- (2) 話し手/書き手の考えを表明し、そこにはたらく彼らの属するコミュニティの価値システムを省察すること
- (3) ディスコースを組織化すること

(Hunston & Thompson, 2000, 6)

評価はテキストの関与者の相互関係ならびに価値判断のはたらく文脈としての「コミュニティの価値システム」に関わり、またそれはテキスト、談話の展開にも関わるものである。こうした評価の言語的形式として、引用による声の相互関連に焦点を当てている。Martin & White (2005) は、価値判断に基づくある言葉への「関与」においては、異種混淆的な複数の声への言及が選択され、それは「投射」という形式で具現されるとしている。「投射」とは、「引用」「話法」に関係するものとされる。

〈声〉の対話的構築の分析の指標

「関与engagement」—「異種混淆性heterogloss」—「投射projection」(「引用」や「話法」)

(Martin & White, 2005, 92-95)

投射の基本類型としては、「引用」「報告」「こと(名詞化)」が位置づけられており、引用は、「～は～と言った。」のように、主として属性(発話者、引用される言葉の帰属者)が示される直接引用

である。「報告」は、～の主張によれば、～は～だということになる。のように、間接引用のかたちをとる。「こと（名詞化）」は、「この～」「～ということ」というように、先行するテキストの内／外の言葉を名詞化して言及するものである。

これらの類型に関連して、Horarik & Morgan (2011) は、生徒のレポートの分析を通して、既存の言葉にどのように言及するかという言葉についてのメタな認識が関わってくることを指摘している。そして、学習の過程において作り出されるテキストの構築の類型として、【個人を中心とした声】【引用を中心とした声】【対話を中心とした声】を設定している。【個人を中心とした声】は一人称による投射の境界があまり明示されないようなテキストである。書き手の考えを述べる場合、自らの思考内容を表す言葉などを用いることで、結果として書き手個人の考えを述べるという書き方になる場合が認められる。【引用を中心とした声】は、複数の言葉を明示的に引用しつつ、それらを俯瞰的にとりまとめるようなテキストである。さまざまな見解や発言を引用するものの、それらをやや羅列的に扱うにとどまり、それらの声相互の関係ならびにその関係に対する書き手の関与が十分になされない場合である。【対話を中心とした声】は、言及される複数の声の相互関係のなかに、書き手自らの声を位置づけ参加するというテキストである。この【対話を中心とした声】が対話的なテキストの構築の具体として学習の一つの到達段階と位置づけられている。

テキスト間の相互関連という見方を教育研究に導入するところで議論されてきたのは、1.に示したように「主題」である。主題は複数のテキストを相互に関連付けるはたらきを持つと同時に、ある事柄を取り上げ、～は～である、というように命題のかたちで示されるような、ある種の見解を示すところに関わってくるものである。学習過程では、書くことの学習過程において主題が形成されていく際に、どのように複数の出所を持つ言葉、声を相互に関連付けていくのが重要な問題となる。学習者の主題への関わりが予め一定の方向性をもった誘導によるのではなく、複数の立場とその声への関与によって当該の書くことにおいて固有の主題へと構成されていくかどうか学習指導の課題となる。こうしたことをふまえ、書くことにおけるテキスト間の相互関連に基づく主題の構成に向けた学習指導を構想し実践を行った。

3. 授業について

授業は2013年12月に岐阜市内の小学校の6年生のクラスにおいて2時間で行った。授業者は野口正史教諭である。授業の大まかな流れは次のようなものである。1時間目は、5から6人のグループに分かれ、グループごとに別々の新聞記事（同じ出来事を取り上げている）を読み、要約文を書く。次に別々の記事を持ち寄って混合班を作り、各自が読んだ記事を口頭で説明する。自分の読んだ記事との違いを中心に話し合いを行った後に意見文1を書く。2時間目には、グループごとに意見文1を発表し、要点の説明を求める質問（「～とは○○ということか。」「要点を一言で言うとどうなるか？」等）を中心とした意見交流を行う。交流の後に意見文2を書く。1時間目の混合班を作って話し合いを行うという活動は澤田（2013）の実践を参考としている。今回の授業では小林 他（2011）で行った授業に基づき、話し合いにおいて相互に書くことに関連するトピックの共有をねらいとする質問を行う活動を取り入れた。同一のトピックについての質問と説明を通して、複数のテキストの情報に関与しつつ書く／話すことを行い、主題の構成（声のパターン）を行っていくという学習を意図している。

1時間目に用いる6種類の新聞記事はいずれもプロ野球の統一球問題という事態を取り上げているが、それぞれの記事は異なる立場、声を中心として書かれている。それぞれの記事の特徴は次のようなものである。

- ・問題に対して日本野球機構が行った説明（子どもニュース）
- ・問題に対するファンの声（複数）
- ・問題の背景にあるボールメーカーの情報（Q & A）

- ・大リーグとプロ野球のボールの基準の違い
- ・問題に対するファンの声 (一人)
- ・問題に対する選手の声

新聞記事は特定の事柄について複数の立場や声を参照しているものの、基本的には社会的に共有される見解、この場合は「統一球問題」への批判的見解を示している。ここで用いた記事についても、上述のような特徴を持つ声を中心的に取り上げているが、基本的には問題について批判的な見解を示している。今回の授業では、このような記事について単に記事としての中心的見解に対する意見ではなく、その見解に相互に関連する複数の声との対話的關係に基づく意見の構築を意図している。こうした意図に基づき、これらの記事を各自でテキストに再構築し (要約)、それを混合班で話し言葉において表現し、要約と話し合いという活動を介してそれぞれの記事の立場、声をふまえた意見文テキストを作り出す (意見文1)。また、意見文1を発表することにより再構築し、それを話し合いの談話に組み入れることを通して意見文テキスト作り出す (意見文2)。2時間の学習を通して、学習者は基本的に複数の活動を通して記事の言葉に向き合い、自らの作り出すテキストに組み入れていくことになり、そこで複数の声の解釈と再構築によって自らの書くことを認識することをねらいとしている。

授業の流れ

全2時間の授業の流れは次のようなものである。

第1時間目

【導入】

- 学習の見通しを持つ。全2時間で話したり聞いたりしながら書くことの学習をする、まず第1時間目は自分なりの考えを書くことまでを行うことを伝える。
- 学習の導入として、普段の身近な生活を振り返る。(これまでにやったことのあるスポーツやそこで用いる道具など)そして、今回の授業ではそうしたスポーツ関係の道具に関する記事を読んでいくことを伝える。

【新聞記事を配布し読む】

- 新聞記事を読み、理解した内容を簡潔に説明する。グループごとに違う記事であることを伝える。読んだ内容について後でグループを変えて混合班になり説明することを伝える。

【まとめる (要約)】

- メモをとりながら読み、原稿用紙に記事を要約して書く。(200字以内)

【混合班を作り交流をする】

- 混合班で理解したことを発表し合う。(要約文を読み上げるのではなく、口頭で説明するように促す。)発表に基づいて、同一の事態についてどのようなことが述べられているか相互の違いを話題にすると共に、各自の思ったことを話し合う。

【意見文1】

- 交流を通して、意見文を書く。(交流を通して、一つの出来事についてもいろいろな考えがあることをふまえながら書くように促す。)
- 意見文を提出する。

第2時間目

【導入】

- 意見文1を返却し、それを読み返す。そして、声に出して自分の考えを口頭で説明する練習をする。(3分間程度)

何人か指名し、意見文1に基づく考えを口頭で発表する。

【話し合い、交流】

○グループで意見文に基づいた意見発表を行い、交流する。

※〈話し合い、交流〉の手順、質問の仕方を説明する。

・「さっき〇〇さん、〇〇さん・・・が発表してくれたように、グループで順番に発表してください。

(※読み上げにならないように注意する)」

・「聞いていた人は、発表者の人にもっともっと詳しく話してもらえるようにはたらきかけてください。たとえば、次のような言い方を用いて、発表者に質問をしてください。」

(紙四枚を黒板に貼っていく)

★「□□□についてももう少し説明して下さい」

(新しい見方や考え方、情報について、さらに詳しい情報を求める)

★「〇〇さんの考えは、要するに□□□ということですか？」

(要点を端的に言うかどうか質問する)

★「〇〇さんの考えを一言で言うかどうかポイントですか?」(要点を求める)

(※交流におけるこの質問の仕方は、小林 他 (2011) に基づく)

※(ある程度時間が経過したところで、発表、質問が一巡したグループは机をもとに戻す)

【意見文2】

○グループでの話し合い、交流を通して、意見文2を書く。(400字程度)

【学習の振り返り】

○2時間の学習を振り返り、「書く」ことについて自分の感じたこと、考えたことを書く。

※意見文1、意見文2の両方を提出する。

4. 学習の実際

特定の学習者に焦点を当てながら、要約文と意見文1、2を検討することにより新聞記事ならびに学習活動の声の再構成と主題の形成について検討する。なお、ここで取り上げる学習者は通常の同じ学習班(第1時間目の最初の班、第2時間目の意見の交流を行った班。混合班ではない。)に属している。

4-1. 声の相互関係

学習者h

要約文

「飛ばないボールと呼ばれたプロ野球の統一球を、日本野球機構(NPB)が今季から、こっそり「飛ぶボール」に変更していた。

そのことについてまわりの人は「変更するなら理由を示してくれれば納得するのに、何ではっきりと言えなかったのか。ファンを見下している」と憤る。ぼくもまったく同じ考え方だ。一方期待感を抱くファンも少なく、今シーズンは長打ちが目立って増えたから、「やっぱりそうか」という感じ。隠さず堂々といえたいのにやドラゴンズにホームランがたくさん出てくればと願った。

ここでは、第1文の最初にかぎ括弧を用いて、新聞記事の言葉を引用している。第2文では「まわりの人」という属性を示し「変更するなら～見下している。」という声を引用している。同様に、第4文では「ファン」という属性を示しながら「やっぱりそうか」、さらに第5文の「隠さず堂々と～でくれば」という声を引用している。第4文で「ぼくも」として自らの考えを述べている。

意見文1

僕はこの記事を読んで飛ばないボールと呼ばれたプロ野球の統一球を、日本野球機構、(NPB)が今季からこっそり飛ばないボールに変更していた。ぼくはこのまわりの人たちと同じように変更するのなら、理由を示してくれれば納得するのに…や何ではっきりと言えなかったのか？ファンを見下しているのもおかしくないと思う。期待をもつファンは、隠さず堂々と言えばよかったのに。今後はドラゴンズにホームランがたくさん出てくれればと願いたいと話している。だから、かくさずに、成かがでたのなら、発表し、でなかったのならでなかったと、発表するべきだと思う。ぼくはうそをついたり、かくしていたりすることによってまわりの人たちがファンにむかって感じ方がちがうことがわかりました。

第1文で「この記事」という属性を明示し、読んだ記事との関連を示している。第2文では、「まわりの人たち」として要約文と同じような属性を示しつつ、「変更するなら～おかしくないと思う」という自己引用によって自らの思考内容として述べている。第3文では、「ファン」という属性を示し、「隠さず～願いたい」という声を引用している。第4文では、属性は明示されていないが、「でなかった」として日本野球機構が述べるべき言葉を提示している。第5文は、構造的な面でやや把握しにくいところがあるものの、「うそをついたり、かくしていたりすること」が、この統一球の問題を知った「まわりの人たち」と、ボールが飛ばないようにすることを期待する「ファン」との間で感じ方の違いがあるということを示している。

意見文2

僕はこの記事を読んで飛ばないボールと呼ばれたプロ野球の統一球を、日本野球機構・NPBが今季からこっそり飛ばないボールに変更していた。ぼくはこのまわりの人たちと、同じように変更するのなら、理由を示してくれれば納得するのに…や何ではっきりとさせないのか？ 不思議です。見ているファンはたのしく野球を見たいのに そのようなことがあると、見ている人が楽しくないので、成かがでたのなら、またなんでも発表することによって、まわりの人たちは、ファンへの感じ方が変わってくると思いました。かくしている理由というのも何なのか？ かくす理由はないとまわりの人は話していると思いました。

第4～6文では、「ファン」は「たのしく野球を見たい」という考えであることを示し、「まわりの人たち」が「理由を示してくれれば納得する」(意見文1より) ことにととまらず、ボールが飛ばようになることへの期待やホームランが出てほしいという願いを持つような「ファン」への「感じ方が変わってくる」という考えを自己引用で示している。第6文では、「かくす理由はない」と「まわりの人」が「話している」と思うとして、「ファン」を含めたボールが飛ばようになることを積極的に受け入れるという考えを示している。

記事に基づき要約文に示された属性、声に言及しながら意見文テキストを書いていることが認められる。統一球問題についての批判的見解をベースにし、それを自らの考えとして提示しながらも、「まわりの人」というこの問題を知った一般的な人たちと「ファン」との感じ方の違いを問題として、「ファン」の感じ方を中心的な声へと再構成しながらボールを変更したことを隠す理由はないことを述べている。

4-2. トピックの導入による声の組み換え

学習者j

要約文

この新聞は、「飛ばないボール」と呼ばれたプロ野球の統一球を、NPBが今季から、こっそり「飛ばないボール」に変更したという内容である。問題として取り上げられるのは、なぜこっそり変更したのかという事で

す。この事について、多くのファンからの声が上がっています。

ファンの中でも、「隠蔽」と批判がでる一方、ホームランの魅力が増したことを観迎する声も聞かれるという事でした。

私は、この事を聞いて、たしかに、ホームランが多くなる事をうれしい事かもしれませんが、やっぱり

第1文では「この新聞は～という内容である」として、「新聞」という属性とその要旨を示している。第2文では「なぜこっそり変更したのか」という問題に言及し、第3文以降では「ファン」にとって「隠蔽」という批判と「歓迎」する声があることを示しており、記事とそこに取り込まれている声を再構成するかたちをとっている。第4文では、途中までではあるが「私は」として書き手に属する何らかの見解を示す述べ方がとられている。

意見文1

私はこの記事を読んで、「飛ばないボール」をこっそり「飛ぶボール」変更したNPBはいけないと思います。たしかに、野球を見ている一人として、ホームランが増えるとしたら、うれしい事だとは思いますが。でも、スポーツの道具を変えるのは、大きさに言うと、ルールを変えたに似ているようなものです。だから私は、変更する事は、いいと思うのですが、やっぱり変更するからには、なぜそのボールにしたかなど、説明する必要があると考えます。

そして、この事からNPBも、今後はちゃんとファンなどの野球を見ている人達に説明したりして、おたがいに、スポーツ（野球）を通してつながりを持っていく事を私は願います。

第1文では、「記事」を参照していることを明示しつつ、「いけない」という書き手に属する見解を提示している。第2文では「野球を見ている一人」として「ホームランが増えるとしたら、うれしい事だ」という考えを述べているが、第3文では「スポーツの道具を変えるのは、大きさに言うと、ルールを変えたに似ているようなものです」とし、道具が選手にとってはルールにも相当するという見方を導入し、第4文ではそのことから選手にボール変更の説明をする必要があるという考えを示している。第5文では、「おたがいに、スポーツ（野球）を通してつながりを持っていく事」とし、第3文で示されていた選手の側の受けとめを含むNPBとの新たなつながりのありかたを提示している。

要約に対して、選手にとってはスポーツの道具はルールであるという考え方を導入することにより、NPBと選手の側の関係について新たな見解を示している。これは、単に新聞記事に関連する立場や声を取り込むということというよりも、「ボール」について「ルール」という見方を導入することにより、既存の声の関係を組み替えがなされていると考える。

意見文2

私は「飛ばないボール」をこっそり「飛ぶボール」に変更したNPBは、いけないと思います。なぜかという、私は、スポーツをやっていた事があるのですが、道具がちがうとスポーツの内容が変わったかのよう、に、ぜんぜんちがいます。ボールをこっそり変えた事によって選手は、すごく困ったと思います。こっそり変える事によって参加していた選手もとまどったと思います。野球を運営する立場として、これはいけないと思ったからです。

そして、もう一つあります。それは、ファンにも説明しなかった事です。何か理由でもあったのかと思いますが、野球ファンがいるからこそ、日本の野球は多くの人が知っていて、応援されているのにもかかわらず、ボールを変えた事を知らさないなんて、ファンにひつれいだと私は考えます。応援してもらおう立場ならそれなりの対応をしてほしいと声が上がってもおかしくないと思います。

だから私は、ボールを変えた事をまわりに知らせる必要があると思います。

ここでは記事を参照することは明示されず、第1文では「私は～と思う」として自らの考えを提示することがなされている。第2～4文においては、ボールという「道具」が変わることは「スポーツの内容」が変わるようなことであるとし、「選手もとまどったと思います」と述べている。第5文からは、「ファン」の立場からの議論を行っており、「何か理由でもあったのか」、「ファンにひつれいだ」という自らの声を挿入し、第7文では「応援してもらおう立場ならそれなりの対応をしてほしい」としてファンの「声」というかたちを用いている。意見文1との関係からすれば、「ファン」についての議論が「私」を属性とする声とファンとしての「声」を参照しながら新たに行われている。〈道具＝ルール〉という見方に基づいて、NPB、選手、ファンの声によって第8文にある「ボールを変えた事をまわりに知らせる必要がある」という見解が書き手に属するものとして示されている。

4-3. 話し合いに基づく声の組み換え

学習者m

要約文

日本野球機構（NPB）は、今季からこっそり「飛ばないボール」から「飛ぶボール」にかえていた。今シーズンから長打がふえたのでNPBに「ボールを変えたのか？」と問い合わせる人もいたかそれに対して否定していた。

このことに対して反対する人もいれば、長打がふえたことはいいことだから堂々と言ってくればよかったのに、という人もいる。

しかも、長打がふえればファンが見て楽しいので、いいと思います。ただどかくさづに言ってほしかったです。

第2文は「ボールを変えたのか？」という声について「問い合わせをする人」、第3文では「長打がふえたことはいいことだから堂々と言ってくればよかったのに」という声を挿入し、第4文では「ぼく」という属性を示しながら「長打がふえればファンが見て楽しいので、いい」という見解を示している。

意見文1

この記事は、日本野球機構（NPB）が今季からこっそり「飛ばないボール」から「飛ぶボール」に変えていた、というものだ。

ぼくは、このことに対して昨季のような点が入らない重い試合になるよりは、長打をたくさん打って、たくさん点が入り、おもしろい試合になった方がいいので、ボールを、「飛ぶボール」に変えることは別にいいと思う。だけど、かくすのは良くないことだから堂々と言ってくればもっと良かった。

でも、選手にとってはボールになれるのがたいへんだったと思うので、あまりボールはかえないほうがいいと思った。

第1文では「この記事」という属性が明示され、「日本野球機構（NPB）が今季からこっそり「飛ばないボール」から「飛ぶボール」に変えていた」という要旨が示されている。第2文からは、「ぼく」という書き手を属性として、「たくさん点が～別にいいと思う」というように自己引用を用いて書き手の見解として示されている。また、第4文では「選手」についての推し量りをおこなっているものの、同様に自己引用を行うことで、書き手に属する見解の示され方がなされている。

意見文2

ぼくは、飛ばないボールを飛ぶボールに変えることは、昨季のような点が入らず重い試合よりは、たくさ

ん点が入り、長打もでるおもしろい試合のほうが良いから、いいと思います。だけどかくすことは絶対にだめだと思います。いくらファンがほしいからといってひみつにするのはよくないし、あまりに長打がふえたので、ボールが変わったのかという問い合わせもあったけど、それにもNPBは否定したので、そんなことはだめだと思います。それにこれは子どもの夢をこわすようなことでもあります。選手も選手で、いかにも自分が打った球が飛ぶようになって変わったとわかったはずなのにひみつにするなんてひどいと思います。

このように、観戦は面白くなるので、ボールを変えることはいいけどかくすのはよくないと思います。

第1文では「飛ばないボールを飛ぶボールに変えること」という「こと（名詞化）」によって、明示されてはいないが記事の言葉を取り込んでいる。第2文は書き手の見解が示されるが、第3文では要約文と同様の「ボールが変わったのか」という問い合わせの声も用いられている。第4文では「これは子どもの夢をこわすようなこと」として、この問題に対する一般的な見解が示される。第5文では「選手」という属性が明示され、「いかにも自分が打った球が飛ぶようになって変わった」という声が挿入されるが、それに対して「わかったはずなのにひみつにするなんてひどい」という書き手の見解が提示される。

意見文1では、記事に基づき書き手を中心とした声によってテキストが作られていたが、意見文2では記事、問い合わせの声、一般的な見解、選手の声が取り込まれることにより、第6文の「ボールを変えることはいいけどかくすのはよくないと思います」という見解が示されている。

5. まとめと課題

複数の記事に基づく複数の要約の交流を通して意見文を書き、さらにその意見の交流を通して書くことの学習を行った。書かれたテキストの検討から、意見文は要約に用いられる声の再構成によって作り出されているという特徴が見出される。しかし、学習者mの事例に見られるように、要約においては読んだ新聞記事に用いられている複数の声の属性と境界が示されながら、意見文1では書き手に属する声を中心としたテキストの構築がなされている場合も認められた。要約では、記事の言葉を用いながら自分の言葉に重ね合わせていくことに自ずと取り組むことから、複数の声の境界と属性が明示される傾向があるものの、意見を書くという場合は自分の考えとしてという述べ方が中心になることがある。とはいえ、意見の交流を通して、新たな声が導入されたテキストへの展開も認められた。また、学習者hの場合のように要約に関連した声の再構成を主とする例、学習者jのように新たな見方の提示に基づく声の再構成という例も認めた。このjのような事例からは、班交流の談話における声の組み替えへと展開する話題が学習指導で重要な機能を果たすことが指摘できる。(小林, 2014c) いずれも、新聞記事が取り扱っている事態についての批判的立場、問題指摘については共通するが、複数の声の構築によってそうした共有される共通の見解に異なった見方が与えられながら書くことが行われていたと考えられる。

検討を行った事例の書き手を含む班の学習の振り返りでは次のような記述が見られた。

- 意見文をかくので文章を理解し、自分の意見を書くこと（伝えること）ができたので、おもしろかったです。(h)
 - 私は、書いて、発表し合うという事を何回もくりかえすことで、1回目は文の内容、2回目は、仲間の意見を知る事ができました。また文の内容をいろんな人の分を聞く事で、いろいろな考えが自分の物として、最後にまとめられてよかったです。(j)
 - たくさんの意見文で交流して他の人の意見を聞くことができました。(k)
- 私はこの授業で、要約文や意見文の書き方が分かったし、他の子と交流して、内容は似たようなかんじでも、それぞれの意見や考えがあって、「ああ、こんな考えもあるのか」と考え方を増や

すことができました。(i)

- ・私は、ちがう記事の人たちと交流したときに、同じ題材を取り上げていても、ちがったことがかいてありました。だから、自分とちがう要約文になっていたことが分かりました。意見文の交流では、一人一人ちがうことを考えていて、自分の意見に取り入れることができました。(l)
- ・ぼくは、このじゅぎょうで、どうやったら短くまとめることができるかや、どうやったらつたわるかなどを学ぶことができました。また、相手はどのようなことを知りたがっているのかも少しわかるようになりました。(m)

同じ題材であってもとらえ方が異なっていること、考えを相互に照らし合わせながら、いくつかの声に表される考えを自分の表現の中で用いていくという意識、すなわち声の再構築についての自覚を伴いつつ一定の主題についての個々の書き手に固有の意見を作り出すことがなされていたと考える。

今回の班の話し合い談話についても、単に主題についての意見の交換ではなく、その主題を支える声についてどのように相互に言及することがなされていくかを検討すると共に、そうした声についての話し合いにつながる指導のあり方について考えていく必要がある。

・参考文献

- Hunston, S. & Thompson, G. (2000) *Evaluation in Text*. Oxford Press
- Kamberelis, G. & Scott, K.D. (1992). Other people's voices: The coarticulation of texts and subjectivities. *Linguistics and education*, 4(3/4), pp.359-404.
- 小林一貴 (2011a) 「書くことの「足場づくり」の談話構造」『月刊国語教育研究』No.465, pp.50-57.
- 小林一貴・遠山健二・井深誠・松永健一郎 (2011b) 「話し合い活動による書くことの「足場づくり」の指導」『岐阜大学教育学部研究報告 (教育実践研究)』第13巻, pp.1-8.
- 小林一貴 (2014a) 「学習者のテキストの対話的構築と「作成活動の追跡」」『岐阜大学国語国文学』第40号, pp.13-23.
- 小林一貴 (2014b) 「書くことの学習におけるテキスト間の相互関連性と主題の構成」『岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学)』63-1, pp.13-22.
- 小林一貴 (2014c) 「書くことの学習におけるトピックの共有とジャンルの対話的構築」『国語科教育研究』(第12回全国大学国語教育学会筑波大会発表要旨集), pp.305-308.
- Lemke, J. L. (1988). Discourses in conflict: Heteroglossia and text semantics. In J.D. Benson & W.S. Greaves (Eds.), *Systemic functional approaches to discourse*, Norwood, NJ: Ablex. pp.29-50.
- Lemke, J. L. (1992). Intertextuality and educational research. *Linguistics and education*, 4(3/4) ,pp.257-268.
- Macken-Horarik, M. & Morgan, W. (2011) Towards a metalanguage adequate to linguistic achievement in post-structuralism and English: Reflections on voicing. *Linguistics and Education*, 22, pp.133-149.
- Martin, J. R. & White, P. R. R. (2005) *The Language of Evaluation*, Palgrave Macmillan.
- 澤田英輔 (2013) 「「質問」で支える読み書き関連学習」『月刊国語教育研究』No.490, pp.58-65.